

アメリカにあって アメリカではない場所

慶応義塾大学環境情報学部 渡辺 靖



タウ島の首長と政府職員

アメリカ領サモア（以下、東サモア）は南太平洋のポリネシア地方一ハワイとニュージーランドを結ぶ線上のほぼ中間一に位置する、赤道以南唯一のアメリカ合衆国の海外領土。面積は沖縄・宮古島とほぼ同じで、人口は七万人弱、サモア語を公用語、英語を共通語としている。日本では小錦や武蔵丸の故郷として、アメリカではプロ・フットボールの選手を数多く輩出していることで有名だ。サマセット・モームの短編『雨』（一九二一年）やマーガレット・ミードの民族誌『サモアの思春期』（一九二八年）といった名作の舞台でもある。

郵便や通貨、電気などはアメリカ本土とすべて同じ。ただし、「住所」や「郵便配達」の概念がないため、郵便はすべて私書箱まで取りに行かねばならない。特定の場所を伝えるときは「目印」のみが頼りとなる。もっとも、携帯電話が広く普及しているため、特に大きな支障はない。インターネット環境は悪くないが、「ハイスピード」でも日本の電話回線以下の速度である。地元の日刊紙が三紙、テレビ局が一つあり、どちらも英語とサモア語が使い分けられている。

東サモア人はアメリカ国民ではあるが、市民権が付与されていないため、大統領選挙や連邦議会選挙に投票することができず、連邦議会下院に議決権を持たない代表一名（任期二年）が認められているにすぎない。こうした状況への懸念から、国連の非植民地化特別委員会は、いまだ世界に残る十六の「非自治地域」の一つにアメリ

カ領サモアを挙げ（アメリカ領では他にグアムとバージン諸島）、自決のための固有の権利に関する調査と協議を促している。

しかし、東サモアは国連に対して、「アメリカの植民地ではない」「アメリカから分離・独立する意思はない」と宣言している。むしろ、イラク戦争を支持するなど、アメリカへの忠誠に揺るぎはない。政府関連の補助金や雇用の恩恵は計り知れないし、アメリカの一部であることに誇りもある。アメリカの政治制度や法律を全て適用しているわけではないため、東サモアは現在のような特殊な政治的地位—アメリカ合衆国非合併・非組織領（an unincorporated and unorganized territory of the United States）—に置かれている。しかし、それは、敢えてアメリカに完全に統合しないことで、東サモアの尊厳と伝統を守ろうとする意図的選択でもある。

こうした東サモアの状況を、現地社会の自律的判断ないし主体的戦略の表れと見なすか、それとも、より根源的な意味において、アメリカによる植民地的支配の継続と見なすか。恩恵者と受益者の構図を見出すか、それとも、支配者と従属者の構図を見出すか。どちらか一方に収斂させて論じることは容易いし、その知的＝政治的誘惑は常に存在する。しかし、東サモアに限らず、アメリカとの関わりが深い社会にとっては、単純な白黒二元論に還元できない両義性のなかにアメリカが存在しているというのが現実なのだろう。

表紙写真 について

ケニアの旅

数年前、ケニア国内を2週間ほど旅した。インド経由でナイロビ到着。一人旅なのでまず市内に向かう足を確保する。性質の悪いタクシーにあたりと身ぐるみはがされたりとんでもない目にあう危険性もあり、さすがに緊張する。運転手の人相を確認し、値段を交渉し、いざ出発。道中不安感いっぱいながら、ガイドブックで目星をつけておいた安宿あたりで無事降りてもらい、一晩の宿を決める。

チェックイン後は早速町歩き。昼間もあまり近づかないほうがいいという地域は避け、人通りの多い街中を歩く。まずは明日以降のサファリツアーを探さねばならない。街中まわりは当然のごとく黒人ばかりなのだが、旅行代理店の客は白人がほとんどで心なし安心する。とにかく「ナイロビは油断のならない治安の悪さ」と聞いているので、初日は心も体も身構えっぱなしであった。

翌日からのツアーも決まり一安心し、マラリアの予防薬など買って明るいうちに宿に戻る。そのうち暗くなってきて空腹を感じ始めたが、「5時以降のナイロビの町の一人歩きは要注意」と本には書いてあり、おじけづきながら食事をする場所を探しに出る。ホテルから至近距離にあまり危険そうでないバーがあったのでそこに入る。早速ビールを頼み、なかなか美味しいケニアのビールを飲んでいるとすぐほかの客に話しかけられる。彼らは普通のケニア人の

ようだったが、とにかく流暢に英語を話すのには感心した。楽しいひと時を過ごし食事も済ませ宿に戻った。結局彼らにビールを何本かおごったが、帰り際にもまだ私から飲み代をせしめようとしていた。彼らはそうやって観光客に毎日のようにお酒をおごってもらっているのかもしれない。「あんなに上手に英語がしゃべれるならもっといい仕事ができそうなのに」と酔った頭で思った。

ケニア人は英語がうまい。「旧宗主国はイギリスだから」だけではすまないくらいうまい。サファリツアーのケニア人ガイド、パトリックも「小学校から高校まで英語を学んだ」と言っていたけれど、私よりはるかに流暢に英語を使いこなしていた。また、ナイロビからモンバサに向かう4人用寝台コンパートメントに乗り合わせたのが、たまたまスーダン人、ウガンダ人、ケニア人であった。4カ国人の共通言語は英語であり、酒も入り大いに話が盛り上がったが、みんなパトリックと同じくらい上手に英語を使いこなしていた。「やっぱり日本も小学校から英語教育をしないとな。」と痛感した。（しかし、中途半端にやるならやらないほうがまだな、と思う今日この頃。）

麻布高等学校 岩佐洋一